

ピアニストからみた 室内楽入門

第11回

ドビュッシーのピアノトリオ

深井尚子●ピアニスト



Shoko Fukai

ウィーン市立音楽院修了。ウィーン古典派をレパートリーの中心に演奏活動中。特にベートーヴェンを深く研究しており、学術論文多数。ベートーヴェンピアノ・ソナタのCD第1集、第2集は好評発売中。色とりどりの小品集ハイドン、ベートーヴェン（ヤマハミュージックメディア）の校訂解説の楽譜も好評。現在、北海道教育大学音楽コース准教授。所属の「メビウストリオ東京」は、ヨーロッパ公演が行われ、好評を得た。



今まで、一般的に良く知られた楽曲を取り上げてきましたが、今回はドビュッシーのピアノトリオについてお話しします。この曲が発見されたのは1977年のことと、出版されたのは1986年。そのため、あまり知られていない楽曲と言えるでしょう。この曲はドビュッシーが17歳から18歳の時である、パリ音楽院の学生時代に作曲されたもので、ドビュッシーの青春時代の習作と言われています。しかし、すでに印象派ドビュッシーを彷彿とさせる美しい曲です。4つの楽章から成り、各楽章のおおの特徴があるなど、パリのエスプリを感じさせる魅力があります。室内楽に限らず、印象派の音楽、特にドビュッシーを演奏する場合はドイツ系作品とは演奏法が異なります。左ペダルによって音質を変えなければならぬ部分が多いこと、ペダルの使い方がかなり複雑になることなどが挙げられます。不協和音も増えてきますが、その和音の連結をすべてはつきりさせるのではなく、あえてペダルを使って曖昧な響きを残すことが大切です。そのため演奏者のセンスで解釈はいろいろとあり、定番の演奏がありません。テンポもバランスも演奏者

トリオ3人の音形がすべて異なっているが、ピアノの和音によって印象派らしい響きになっている

によってかなり異なることが多いのです。それらを見まわして、このピアノトリオを見てみましょう。やはりドビュッ

シー独特の響きは、ピアノが担っています。この曲はピアノが常に和音を弾いていて、その和音の連続は速いパッセージでもおかまいなしに書かれているため、実はとても弾きにくいのです。弦楽器もメロディーなどがとても弾きにくい音形をしているので、トリオ全員がある種の弾きにくさを感じつつ演奏しています。このことは「ドビュッシーの習作」ということに理由があるようです。まだ学生で勉強中の若きドビュッシーは、ヴァイオリンやチェロなど弦楽器の特徴をあまり把握していなかったのではないかと。また、ピアニストから見てもピアノの機構などをあまり気に留めていなかったような印象を受けます。当時は印象派の音楽がほとんど受け入れられていなかったため、ドビュッシー自身が、新しい音楽の方向に向かって模索していた時期であったと思われるかもしれません。この曲は、そのような理由から作曲上の未熟さを感じますが、印象派独特の和声や変わり行く転調のおもしろさ、パリのおしゃれな雰囲気を感じられる作品だと思えます。第1楽章の自由な楽想、パストラル風の第2楽章、メロディーが美しい第3楽章、そして激情的で少し古典的な第4楽章……と、弾きにくいと言いつつ、つい引き込まれます。1度、聴いてみてはいかがでしょう？